

Title	史的唯物論について
Sub Title	
Author	加田, 哲二(Kada, Tetsuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.11, No.4 (1933. 2) ,p.19(525)- 57(563)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史的唯物論について

加田 哲 二

一

マルクスの理論は一の「世界観」であるとは、マルクス主義を奉ずる何人もいふところである。而して、この「世界観」は科學的基礎の上に建設されてゐるといはれる。(プレハノフ・マルクス主義の根本問題) エンゲルスは「社會主義がこれによつて一個の科學となつた」マルクスの二大發見について語つてゐる。「二大發見」とは、唯物史觀と餘剩價值論である。エンゲルスは餘剩價值論を説明して次のやうにいつた。

「從來の社會主義を現存の資本家的生産とその結果を非難したには相違ないが、それを説明することが出来なかつた。……彼等は單にそれを悪いものとして非難するだけであつた。……ところが、それ

を説明するには、一面には、資本家的生産方法の歴史的關係を示し、即ち一定の歴史的時期におけるその必然性に従つてまたその滅亡の必然性を示し、そして一面には、まだ陰蔽されてゐたところの、その内的特質をあばくことが必要であつた。そしてそれを成し遂げたのが、即ち『餘剩價值』の發見であつた。餘剩價值説の説明するところによれば、不拂労働の領有が資本家的生産方法及びその下に行はれるところの労働者搾取の根本形態である。又資本家は労働者を商品としてそれが市場で有する全價值をもつて買取るのだけでも、彼は猶ほその支拂つたより以上の價值を労働者から搾取するのである。そして結局、この餘剩價值が有産階級の手中に不斷に増加する大資本を積みあげるところの、その價值の總額の出處である。資本家的生産の、及び資本の生産の道行は、ともにこれで説明された。」(エンゲルス 空想より科學への社會主義の發展)

この餘剩價值論はマルクスが最も立派にその資本論第一卷において展開した經濟學の根本思想である。今本論文に關係のあるのはその史的唯物論または唯物史觀である。エンゲルスは、同じくこの史觀を次のやうに要約してゐる。

「唯物史觀は次の命題から出發する。即ち生産及びそれに次いで、その生産物の交換が、一切の社會制度の基礎である。歴史上に現はれた各社會における生産物の分配及びそれと共に階級もしくは身分の社會的編成は何が如何に生産せられ、そして如何にその生産物が交換されるかによつて定まるこ

とこれである。この故に、あらゆる社會的變化および政治的革命的究竟の原因は、人間の頭腦の中に求むべきではなく、即ち永劫の眞理および正義に對する人間の智見の増進に求むべきではなく、實に生産方法および交換方法の變化に求むべきである。即ちこれをその當時の哲學に求むべきではなく、實に經濟に求むべきである。現存の社會制度が漸く不合理と見え、不正と見え、道理が不道理となり、善が悪となつたといふ考への起るのは、實に只生産方法及び交換形態が暗黙の間に變化を遂げたため、以前の經濟條件に合せて作られた社會制度が、もはや現條件に適合しなくなつた證據なのである。同時に又この發見された弊害を除去する手段方法が矢張りその變化した新らしい生産關係そのものの中に、必ず多少とも發達して存在せねばならぬ筈である。そしてその手段は決して頭の中から發明さるべきものではなく、只だ頭によつて生産といふ現存の物質的事實の中に發見するべきである。」(エンゲルス同上書)

マルクスはこの史觀を一八四四・五年頃にいたつて、エンゲルスとともに到達した史觀である。エンゲルスはいふ。「余が一八四五年の春、ブルユッセルにおいて、マルクスに會つたとき、彼は既に余がこの文章において述べたやうな明確な言辭で、この學說を表現し、これを余に示したのである。」(一八八八年英譯版共產黨宣言への序文)ここにいふ「この文章」とは、次の如きものである。「すべての歴史的時代において、當時行はれてゐる經濟的生産並に交換及びこれから必然に發生する社會組織がこの上に建設せらるるを

の時代の政治的並に知的歴史の基礎をなし、且つそれは、これによつてのみ説明せらるゝのである。従つて、土地を共有してゐた原始的民族社會の解體以來の人類の全史は階級闘争の歴史であつた。搾取階級と被搾取階級、支配階級と被抑壓階級の抗争であつた。而して、この階級闘争の歴史は進化の連続であつて、今日においては、被搾取、被抑壓階級たるプロレタリアが搾取、支配階級たるブルジョア階級の支配から自分を解放するとともに、同時に社會全體をすべての搾取、抑壓、階級區別、階級闘争から一舉にして解放せざるを得ない階段に達してゐるのである。」(一八八三年版共産黨宣言への序文)

二

かくの如き唯物史觀は、マルクスの創説とせらるゝところである。それは言葉の眞の意味においてさうである。それは、マルクス・エンゲルスが、一夜突如發見または發明したものであるといふ意味である。マルクス・エンゲルスは自らかゝることを主張したものでないことは明かである。エンゲルスは近代社會主義のオリエンティールングについて次のやうにいつてゐる。

「近代の社會主義は、その内容よりすれば先づ、第一に、一方に於ては、近代社會内に存してゐる所有者及び非所有者、賃銀労働者及びブルジョアの階級對立、他方に於ては、生産を支配してゐる無政府状態の認識から生れたものである。然し乍らその理論的の形式よりすれば、最初は十八世紀の偉大

なフランスの啓蒙論者に依つて確立されたる根本原理のより徹底した言はゞより合理的な發展として現はれたのである。凡ての新らしい學說と同じく、近代の社會主義も、その根柢が如何に深く經濟的事實の中に存してゐようとも、先づ在來の學問思想に結合せねばならなかつた。」(エンゲルス 反デュウリ
ング論)

これは主として、英佛の社會主義——マルクスのいふ空想的社會主義——についていはれたことであるが、エンゲルスは尙ほマルクス—エンゲルスの社會主義についても、同様の説明を與へてゐるのである。彼は、彼等以前の社會主義とその直接の先驅者である革命的ブルジョア思想の形而上學的立場と彼等の辯證法的立場とその發展を對比した後で次のやうにいつてゐる。

「然し乍ら、自然觀の變革は、唯探求によつて適當な實證的な知識の材料が與へられる程度に應じて行はれ得たに過ぎぬが、之に反して歴史觀に決定的な革命をもたらした歴史上の事實は、既にずつと以前から行はれてゐた。一八三一年リヨンに於て、最初の労働者の騷擾が行はれた、一八三八年から一八四二年にかけては、最初の全國的な労働運動——イギリスのチャーティストの運動が、その最高點に達した。プロレタリアートとブルジョアジーとの間の階級闘争は一方に於ては大工業が、他方に於ては新に獲得されたブルジョアジーの政治的の支配が發展するに應じて、ヨーロッパの進歩した國々の歴史の前面に現はれた。資本と労働の利害が一致すると説き、一般的な調和及び一般的な民福を

自由競争の結果なりと観るブルジョア經濟學説は、事實に依つて、益々明白にその欺瞞が暴露せられた。これ等全てのことはもはや拒否することは出来ない、同様に極めて不完全ながらも、それが理論的の表現であつたフランス及びイギリスの社會主義も拒否することは出来ない。然し乍ら未だ全く排除せられなかつた古い理想主義者の歴史觀は、物質的の利害に基づいた階級闘争についても、一般的に物質的の利害についても、何等知るところがなかつた。生産並に全ての經濟關係は『文化史』の下級な要素として唯偶然にその中に現はれてゐるに過ぎない。新しい事實は一切の從來の歴史を新に研究せしめることを餘儀なくした。かくして、全ての從來の歴史は階級闘争の歴史であり、この相互に相争ふ所の社會階級は常に生産及び交換の關係、一言にして蔽へば、その時代の經濟的關係の所産である、それ故に夫れ々の社會の經濟的構造が現實の土臺であり、各時代に於ける法律的及び政治秩序並に宗教的、哲學的その他の觀念方法の全上層建築は結局において、これから説明すべきものであることが明にされた。これに依つて理想主義はその最後の逃避所たる歴史觀から追放され、唯物史觀が生じた。從來の如く人間の存在をその意識から説明するのではなく、人間の意識をその存在から説明する方法が発見された。(エンゲルス、反デューリング論 序説)

かくの如き現實的制約によつて、マルクスはその思索の構成において、前代の遺産を繼承した。エンゲルスは、「吾々獨逸の社會主義者は、サン・シモン、フウリエ、オウエンに由來するのみならず、また

カント、フイヒテ、ヘエゲルに由來することを誇りとする」といつてゐる。(空想より科學への社會主義の發展 第一版序文) この言葉は、同じエンゲルスの「勞働階級にあつてのみ、ドイツの理論的性向は害はれず存續してゐる。……ドイツ勞働者運動は、實にドイツ古典哲學の繼承者である。」といふ文章とともに有名である。(エンゲルス、フォイエルバッハとドイツ古典哲學の終焉) 經濟學說についても、エンゲルスは次のやうにいつてゐる。

「如何なる傾向のものにもせよ、兎に角近世社會主義なるものは、それがブルジョアの經濟學から發足する限り、殆んど例外なしにリカルドの價值說に結びついてゐる。一八一七年、リカルドはその『原論』の冒頭で(一)凡そ如何なる商品の價值も、専らその生産に要する勞働の量によつてのみ決定されるといふ、また(二)社會的勞働全體の生産物は地主(地代)資本家(利潤)及び勞働者(賃銀)なる三階級の間分配されるといふ、この二つの命題を樹立したのであるが、それらの命題は既に一八二一年以來、イギリスでは社會主義的結論の材料として利用されてゐた。それも一部分には非常なる鋭さと決斷とを以て利用されたものであつて、今や殆んど忘れ果てられ、漸くマルクスに依り、大部分を再發見されたこの文獻も『資本論』の出現當時に至るまでは、他の如何なる學說によつても打克たれず存在してゐたといふ有様であつた。」(マルクス 哲學の貧困 エンゲルスの序説)

マルクスの思想は、以上のエンゲルスの言葉によつても明かなやうに種々な先驅者を持つてゐる。フ

ランツ・オッペンハイマアはマルクスの先驅者として、その社會學においては、ロレンツ・シュタイン、その經濟學においては、デヴッド・リカルドを擧げてゐる。(オッペンハイマア シュンタインとドイツ社會學)この見解は極めて一方的で妥當でないが、これらの思想家の學問系統の影響を受けたことだけは確かである。オッペンハイマアの見解を更らに押し進めるべきである。さうすれば、マルクスの思想的先驅者として擧げらるべきものは、ドイツ古典學、イギリスの唯物論哲學のフランスに入つて發展した社會思想、並にイギリス經濟學の三つであらう。故にレーニンはいつてゐる。「マルクスは人類の三つの最も進歩した國家に屬する第十九世紀の三つの主要なる思想傾向、即ちドイツの古典哲學、イギリスの古典經濟學、及びフランスの革命的學說一般と關聯せるフランス社會主義の繼承者であり、天才的な完成者であつた。」(レーニン、マルクシズム)カウツキイは、これに次のやうな説明を與へてゐる。

「英國は彼等——マルクス、エンゲルス——に多くの事實上の經濟資料を、獨逸の哲學は、これらの材料から現在の社會發展の目標を引き出す最良の研究方法を提供した。最後にフランスの革命は吾人がこの目標に達せんがためには、如何にして、權力殊に政治的權力を獲得しなければならぬかを最も明白に彼等に指示したのである。かやうにして、彼等は、英吉利の、フランスの、ドイツの思想におけるすべての長所と實益とをひとつの高い統一體に綜合することによつて、かの近世科學的社會主義を造り上げたのである。」(カウツキイ著 カアル・マルクスの歴史的使命)

マルクスがその思想構成において、各々英、獨、佛から繼承したものは、便宜上、哲學、社會學、經濟學の三つの部分である。マルクスの思想構成の發展の順序からいへば、哲學（辯證法的唯物論）社會學（史的唯物論）經濟學（資本制生産の解剖）といふ一聯の順序となるが、マルクスの思想はこれらの総合的構成における一の世界觀である。プレハノフはいふ。

「マルクス主義は古希臘において、デモクリトスにより又部分的には、その先驅者たるイオニアの思想家たちにより、根柢を置かれた世界觀が現に到達せる最高の發達階段を示すところの近代的唯物論である。謂はゆる萬物有生論は一の素朴的唯物論に他ならぬ。而して、近代唯物論の建設につき最大の功勞を有するものは疑ひもなく、カアル・マルクス及びその友人フリードリッヒ・エンゲルスである。實に近代的唯物論の歴史的並に經濟的方面は、その根柢においては、これらの兩人の業績である。謂はゆる史的唯物論及びそれと密接の關係ある經濟學の任務、方法、範疇に關する及び社會殊に資本主義的社會の經濟的發達に關する思想の一團は殆んど皆彼等にその成立を負ふものである。」（プレハノフ著 マルクス主義の根本問題）

三

マルクスの立場は唯物論である。而してすべての哲學は究極において、唯物論と觀念論に分たれる。

すべての哲學、殊に近代の哲學の大なる根本問題は思惟と實有との關係の問題である。……精神と自然とが何れが本源的かといふ、この問題に對する答へ方につれて、哲學者は二大陣營に分裂した。自然に對する精神の本源を主張し、從つて結局において、何等かの種類の宇宙創造を認容した人々は、觀念論の陣營を構成した。それに反して自然を本源的なものを見た人々は、唯物論の種々の流派に屬してゐる。觀念論および唯物論といふ、この兩つの言ひ表はしは、本來これ以外のことを意味するものではない。」(エンゲルス著 フォイエルバッハとドイツ哲學の終焉) マルクスは勿論唯物論の側に立つてゐる。而して、それにマルクス—エンゲルス独自の方法を加へたのである。エンゲルスはいふ。

「マルクス及び私が意識的な辯證法をドイツの觀念主義的な哲學から救つて、自然及び歴史の物質的な觀方に導いた恐らく唯一のものであつたらう。然し乍ら、自然の辯證法的にして同時に物質的な觀方には、數學及び自然科学の知識が必要である。私がこの數學及び自然科学の略説の際に問題にしたのは、勿論次の事實を個々の點において——私にとつては、一般的には何等の疑問もなかつたけれども——確信することであつた、即ち自然においても、歴史においても外見上偶然に見ゆる事件を支配してゐるあの同じ辯證法的な運動の法則が、無限の變化の錯綜を通じて一貫してゐると云ふことである。それは人間の思惟の發展史において一貫した糸條コテリをなしながら、次第に思惟する人間の自覺に到達する同じ法則であり、初めてヘーゲルに依りて包括的に、しかし神秘な形式に述べられた法則であ

る。しかもそれをこの神秘的な形式から取り出してその單純性及び一般妥當性を、判りと意識するのが我々の努力の一であつた。」(エンゲルス 反デュウリグ論に對する一八八五年の序文)

しからは、辯證法とは何であるか。それは事象の本質的觀察方法である。

「吾々が自然もしくは、人間の歴史、もしくは、吾人自身の精神的の行動を考察して見るときに、吾々には先づ聯關及び交互作用の無限の錯綜——それにあつては、何物も性質、場所、状態において、あるがまゝには存續しない、萬物は動き、變化し生滅する——の映像が興へられる。この原始的な素朴な、しかし事物の性質上、正當な世界觀は古代ギリシア哲學の觀方である。そして、始めて、ヘラクリットによつて、明瞭に言ひ表はされたのである。曰く、萬物は存在するし、また存在しない、何となれば、萬物は流轉するから、不斷の變轉、不斷の生滅の過程にあるからと。」(エンゲルス 反デュウリグ論)

しかるに、エンゲルスに従へば、この見解は、現象全般の一般的性質を正しく理解してゐるのであるが、これによつて、この全體が構成されてゐる個體を説明するには不充分である。従つて、この個體との關聯から抽出して、それだけをその因果關係において研究しなければならぬ。しかるに、この研究は古代ギリシアの自然科学または歴史的研究においては、全體的觀察に對して、從屬的地位にあつたのであるが、後に、この個體のみを全體から分離して考察する學問の發達となり、引いては、孤立的形式論

理的研究にのみ没頭する形而上學的思索方法を作り上げたのである。辯證法的方法はこの形而上學的方法に對置するものであり、それは自然の事象の反映である。

「形而上學者にとつては、事物とその思惟における映像たる概念とは、孤立した個々別々にしかも他と關係なしに考察せらるべき固定した確固たる永久不變の研究の對象である。彼は全然媒介されない兩極端において考へる。即ち彼の言葉は、然りは然り、否は否である。これより過ぐるは惡より出づるである。彼にとつては、ある事物は存在せるか、さもなくば存在せぬかの何れかである。又同様にある事物が同時にそれ自身であるとともに、他のものであるとは出來ない。積極と消極とは絶對的に排除し合ふ、同様に原因と結果も亦相互に不動の對立をなす。この考へ方は、所謂常識のそれであるといふ理由で、一見極めて尤もらしく思はれる。しかしながら常識は自ら作つた封建的な領域内においてこそ、尊敬すべき伴侶であるが、一步探求の廣い世界に踏み出すや否や、全く驚くべき冒險を冒すこととなる。形而上學的の考へ方は、對象の性質に應じて廣狹はあるが、可成廣い領域において、是認せらるべきものであり、また必要ですらあるが、然し早晚必ず一つの限界に衝き當る。それを超えると、それは一面的な狹隘な抽象的なものとなり、解くべからざる矛盾に迷ひ込む。蓋しそれは、個々の事物に捉へられて、その聯關を、その存在に捉へられて、その生滅を、その靜止に捉へられて、その運動を忘れ、畢竟は樹木を見て、森を見ないから……。すべての有機體は、時々刻々同じもので

あり、また同じものでない。それは時々刻々外部から攝取した物質を消化し、他の物質を排泄する、時々刻々その身體の細胞は死滅して新しい細胞が作られる、遅かれ早かれ一定の時間の後には、その身體の物質は全く更新せられ、他の元素によつて更代される、それ故に全ての有機體は常に同じであり、然も別物である。同様に我々は、より正確に觀察すると次の事實を見出す、即ちある對立の兩極例へば積極と消極は、一方互に對立してゐると共に、他方互に分離することが出来ない關係にあり、あらゆるその對立にも拘らず、相互に流通し合ふといふこと、同様にまた原因及び結果は、孤立して個々の場合に適用する時のみ、妥當性を有する表象であること、しかし、我々の個々の場合を世界全體と聯關せしめて觀察するときには、原因と結果とは、同一に歸し、結局原因と結果とは絶えず、その地位を變へ、今あるひはこゝで結果であつたものが、やがて或は其處では原因となり、遂にはまた原因は結果となるといふ一般的の交互作用なる見地に歸着するといふことが知られる。……事物及びその概念には映像を本質上聯關において連鎖において、運動において、その生滅において、把握する辯證法にとつては、上述の如き現象は、みな辯證法自身の考へ方を確證するものである。自然は辯證法の證據である。……全宇宙の發展及び人類の發展並びに、この發展の人間の頭腦における映像の精密な説明は、だから辯證法的方法においてのみ、成就することが出来る。」(エンゲルス 反デュウリング論)

この辯證法的思索方法は、古代ギリシアにおいて、而して近代においては、ドイツ古典哲學、殊にへ

ヘゲルにおいて發展したものである。マルクス・エンゲルスはこの古典哲學から、この方法を繼承した。彼等が「ドイツ労働者運動は、實にドイツ古典哲學の繼承者である」(フォイエルバッハ論)といつたのは、この辯證法的方法を古典哲學から繼承し、これを革命的に發展せしめた意味に外ならぬのである。

四

マルクス・エンゲルスはドイツ古典哲學からその辯證法をそのまま繼承したものではない。彼等が自分の辯證法を唯物辯證法といふ所以はこゝにあるのである。マルクスはいふ。

「私の辯證法的方法は、根本において、ヘゲル流のそれとは異なるのみでなく、また正反對のものである。ヘゲルにとつては、思惟行程——彼は更らにこの行程を觀念と呼んで獨立の主體たらしめたのであるが——は現實的なるものの創造主であつて、現實はたゞ思惟行程の外部現象たるに過ぎぬ。これに反して、私の立場から見れば、觀念的なるものは畢竟するところ、人類の頭腦の内て變更され、翻譯された物質的なるものに外ならぬのである。

「ヘゲル式辯證法の神祕的方面については、今を距ること殆んど三十年前、即ちヘゲル辯證法が尙流行してゐた時代に、私はこれを批判した。然るに私が『資本論』第一巻を書いてゐた當時、今日教化されたドイツにおいて巾を利かしてゐる所の、氣六づかしい、横柄な、凡庸な口眞似學者たちは、

嘗てレッシングの時代に勇敢なるモゼス・メンデルスゾーンがスピノザを取扱つたのと同じ様に『死んだ犬』としてヘゲルを待遇することに満足を感じてゐた。私が大思想家ヘゲルの門人なりとみづから公言し、おまけに價值論を取扱つた章の此處彼處で、わざと彼れ獨特の口吻を弄んだ所以は茲にある。辯證法はヘゲルの手で神祕化されたとはいへ、この事實は決して、ヘゲルが辯證法の作する一般の形態を、包括的に且つ意識的に表現した最初の學者であることを妨げるものでない。辯證法はヘゲルにおいて逆立してゐる。我々は神祕の外殻の内に合理的の核心を見出すため、この逆立ちした辯證法を更らに轉倒せしめねばならぬ。」

「辯證法は神祕化された形態をもつて、ドイツの流行となつた。それは現存の事態に光明あらしむるものの如く見えたからである。反對に合理的の姿における辯證法は、ブルジョア及びその偏理的代辯者達にとつて、苦惱となり、恐怖となるものである。なせならば、辯證法なるものは、現存事態に對する肯定的理解の中に、現存事態に對する否定的理解をも必然的消滅の理解をも含めてゐるからである。それは歴史的に生成した一切の形態をば、不斷流動しつゝあるものとして、經過的の方面から觀察し、何ものにも怖れることなく、本質において、批判的革命的たるが故である。」(マルクス資本論第一卷 第二版序文)

かくの如きマルクスの主張はデボーリンをして次のやうにいはしめてゐる。

史的唯物論について(加田)

「唯物辯證法は、歴史的並に、論理的には、直接にヘエゲル辯證法に接してゐる。そして後者がマルクス・エンゲルスによつて唯物論の基礎の上に加工された限りにおいては、唯物論的辯證法はそれの繼續であり、又その爾後の發展である。辯證法は人類の思惟の全史の發展の結果であり、科學や哲學や人間の實踐的創造の最高の産物である。」(デボリン 辯證法——ヘエゲル論理學批判) 而して、ヘエゲルとマルクスの差異については次のやうにいつてゐるのである。「かくてマルクスの方法は二つの關係においてヘエゲルの方法とは異つてゐる。第一にマルクスの方法は、その出發點、その認識論的根據(思惟と存在の相互關係の問題を解決する意味においての)の點から見て、また世界觀一般の點からみて、ヘエゲルのものとは異つてゐる。第二に、——このことも同様に重大な意義をもつてゐるのであるが——マルクスの方法は具體的なものと抽象的なもの、物質的なものと形式的なものとの關係の問題を別様に解決したといふ意味において、ヘエゲルの方法に對立してゐる。このことはマルクスの唯物論的世界觀一般に直接の關係がある。マルクスがヘエゲル辯證法の神祕的並びに神祕化的形式として理解してゐるものは、ヘエゲルにおいては幻想、論理的圖式の形式を取つた眞の具體的なものとして現出してゐる。このためにマルクスは何よりも先づ神祕的形式の背後に合理的形式すなはち抽象的幻想の現實的内容を發き立てることに當面したのである。」(デボリン 前掲書)「ヘエゲル論理學に對するマルクスの批判は形式主義及び抽象的思惟に對する批判として行はれた。マルクスはヘエゲルの抽象的

論理學に具體的且つ實質的な論理學を對置してゐる。この點にマルクス辯證法とヘーゲル辯證法の根本的差異がある。マルクスはヘーゲルを繼續し、辯證法の發展を完成させたが、すでにそれは新しい基礎において行はれてゐるのである。」(デボリーン 前掲書)

辯證法は、「凡ゆる運動の最も普遍的な法則の學」であり、「自然及び人間歴史における運動に對しても、思惟の運動に對しても均しく妥當性を持たねばならぬ。」即ち辯證法は自然歴史及び思惟の三領域に對してその妥當性を持つてゐるとエンゲルスはいふのである。(エンゲルス、反デュウリング論への註、同遺稿、自然辯證法上卷)

世界觀としてのマルクス主義はその必然的結果として、自然、歴史及び思惟の三領域に關する體系が樹立されなければならなかつたのである。その結果、マルクス・エンゲルスは自然科学にその注意を向けなければならなかつた。彼等は、自然科学の重要性を初めから認識してゐた。マルクスはその初期の著作において「批判的批判は人間の自然に對する理論的、實踐的行爲、即ち自然科学と産業とを歴史の運動から除外しておきながら、歴史的現實の認識において、その端初にだけでも到達したと考へてゐるのだらうか。あるひはまた、例へばいづれかの時代の産業、即ち生の直接的生産方法をさへ認識しないで置いて、その時代を實際認識したとでもいふのだらうか。」(マルクス・エンゲルス、神聖家族)といつてゐる。

しかるにマルクスは、歴史的科學の構成に忙はしくして、自然科学の研究にまで到達することは出來

なかつた。これに對して、エンゲルスは自然科學に對する若干の考察をしてゐる。それは自然科學の方法としての辯證法についてである。エンゲルスは自然科學の當時の状態について次のやうにいつてゐる。

「經驗的自然科學は、尨大な多量の實證的な認識材料を集積した。そこで必然的にかゝる材料を凡ゆる個々の研究領域において、系統的に、且つ内部的關聯に應じて、整理しなければならぬことは全くいなみ難いことゝなつてゐる。これと同じく個々の認識領域を相互に正しい關係に立たしめることもまたいなみ難くなつてゐる。しかしながら、これとともに自然科學は理論の領域に進むことになるのである。そしてこゝでは經驗的方法是を用をなさない、たゞ理論的思惟が役立ち得る。しかしながらこの理論的思惟は素質として見た場合にのみ一の生得的な特性であるに過ぎない。かゝる素質は開發され、訓練されねばならない。そしてかゝる訓練には今迄のところでは從來の哲學の研究以外にいかなる手段もないのである。」(エンゲルス 自然辯證法) この經驗的自然科學を救ふものは、辯證法である。「自然科學の辯證法——對象は運動する物質。物質の種々な形態や種類自體は、また運動を通じてのみ認識することができ、運動においてのみ、物體の性質は現はれる、運動しない物體については、論すべき限りではない。それ故、運動の形態からその運動物體の性質がでてくる。」(エンゲルス 自然辯證法) かくの如く論斷する理由は、「所謂客觀的辯證法は自然全體に互つて行はれてゐる、そして所謂主觀的辯證法、即ち辯證法的思惟は、自然のあらゆる部分を貫いてゐる運動——絶えず衝突し竟ひに相互の中へ、または一層高い形態へ流入

し、かくてまさしく自然の活力の條件をなすところの諸對立をなして進行する運動——の反映に過ぎない。引力と斥力と。磁氣においても兩極が生ずる、それは同一の物體に現はれる。電氣においては、兩極は相互に張力を及ぼし合ふ二個または、二個以上の物體に配當せしめられる。あらゆる化學的過程は化學的吸引および反撥の過程にすぎない。最後に有機的生命においては、細胞核の形成は、同様に生ける蛋白質の分極作用と見做すことが出来る」からである。(エンゲルス 自然辯證法) 故に「まさにこの辯證法こそ、今日の自然科学にとつて最も正しい思惟形式なのである。なせならば、辯證法のみが獨り自然の中に行はれる進化の諸過程に對して、總括的全體的な諸聯關に對して一つの研究領域から他の夫れへの移り行きに對して、類推を、從つて説明方法を提供するからである。」(エンゲルス 自然辯證法)

デボーリンによれば、自然科学と哲學との結合は、唯物論的辯證法に基くとき始めて實現され得るのである。「現代の自然科学はエンゲルス及びレーニンによつて豫言された新しい發展の時代にすでに這入つてゐるやうに思はれる。偉大な自然研究者は、科學の發展行程そのものによつて、科學を理論的に究明することを餘儀なくされてゐるかぎり、辯證法の見地に推移してゐるのである。若しくは、推移し始めてゐるのである。現代の科學が『混亂激動』の時期を経験してゐることは疑ひのないことである。恐らく吾々は現代科學の建築物全體のある建直しに直面してゐるのであらう。だからして多くの自然科学者が何れかの科學部門の中に蓄積された諸矛盾を理論的に究明し得ずに、觀念論に飛躍し、甚だしき

は神祕主義に飛躍してゐるのは、敢えて驚くに足らない。舊い形式論理學は、これらの諸矛盾を克服することにとつて、不十分なものとなつてゐる。それは辯證法的論理學によつて取り替へられなければならぬ。」(デボーリン 辯證法)

かくの如き辯證法は自然科学の領域において、今日所期の成功を収めたであらうか。これに對して、自然科学的知識の不十分な吾々はこれを批判することは出来ぬ。しかしながら、デボーリンの如きも、それをまだ斷言すが如き状態に達しないことを認めてゐる。曰く「辯證法的方法はマルクスのおかげで社會科學の領域に變革をもたらす可能性を與へたとしても、自然科学については、まだまださうとは云へないのである。自然科学の領域では『傳統』の力が餘りにも大きいので、形而上學的思惟方法の偏見をやすくと克服することは出来ない。しかしながら、この領域においても、辯證法の適用を不可避的に必要とさせるやうな過程が行はれてゐる。すべての問題は自然研究者たちが、自分等の領域に對する辯證法の巨大な科學的意義をまだ今のところ意識してゐない點にある。エンゲルスの『自然辯證法』はまだ自然研究者の側から當然の承認を受けてゐない。しかし吾々はこの方面には將來必然的な轉機が起るものと考へねばならぬ。」(デボーリン 辯證法)

この方における顯著な研究は現はれつゝある。デボーリン、ストリヤロフの研究の如きはその一例であるといへる。(デボーリン 辯證法)しかしながら、吾々はこの方面に直接關係を有するのではない。吾

吾の關心は、史的唯物論そのものにある。

五

史的唯物論は唯物辯證法の歴史並に社會に對する認識である。マルクス・エンゲルスは比較的早く史的唯物論に到達したのであるが、彼等は既に一八四五年に次のやうな明確な言葉をもつてその理論を展開してゐる。

「この史觀はその基礎を次のところに置く、即ち現實的生産過程を、しかも直接生活の物質的生産から出發して、これを發展せしめ、而して、この生産方法と關連して、且つこれによつて作られた交易形態を、即ちその種々な階段における市民的社會を全歴史の基礎と解し、この市民的社會を國家としての行爲において、敘述するとともに、種々の理論的產物、意識の諸形態、宗教、道德、哲學等の全部をこれから説明し、これらのものから生ずるその成立過程を追究することに存する。勿論この場合、事象はその全體において、（及び故にまたこの種々なる方面における相互に對する相互作用）も敘述せらるゝのである。この歴史觀はすべての時代において觀念史觀のやうに、一の範疇を求めるところを必要とせず、常に現實の歴史的地盤の上に止まり、實踐を理念から説明しないで反つて理念の形成を物質的實踐から説明する。而して、これに應じて、次の如き結論に到達する。意識のすべての諸形態及

び産物は、精神的批評によつて、『自意識』への解消、『妖怪』『幽霊』『狂氣』などへの轉形によつてではなく、この觀念論的饒舌のそれから發生する現實の社會的關係の實踐的革命によつて解消せられる。即ち歴史の、而して、また宗教、哲學、その他の理論の推進力は批評ではなくて革命である。』(ドイッチ・エ・イデオロギー)

而して、この史觀は一八五九年のマルクス「經濟學批判」の序文において、「一般的結論」とせられてゐる有名な文章となつて現はれてゐる。この文章は以上に引用した文章をもつて精緻な形態において、表現したもので、マルクスが、「かくて私の得たところの、そして一旦これを得た後は、私の研究の導きの絲となつたところの一般的結論」といつたものである。(マルクス經濟學批判 序文)而して、彼の史的唯物論の方法は全き意義において、辯證法的である。マルクスはその辯證法の理解者として、資本論第一卷に對するペテルスブルクの「キエストニーク・エウロプイ誌」の批判を擧げ、且つその方法論の部分を自らの理解者として、資本論第一卷第二版の序文に擧げて、その方法論を説明した。

「マルクスにとつては、研究の對象たる諸現象の法則を發見するといふ一點のみが重要であつた。而も、彼にとつて重要となつたのは、此等の現象が一の完成された形態を有し、且つ與へられたる歴史的期間の範圍内に見られる如き相互の聯絡を保つ限りにおいて、支配を受けるところの法則だけではない。更らに、此等の現象の變化、これらの現象の發達の法則、即ち一の形態から他の形態への一組

の相互聯絡から他の一組の相互聯絡關係への經過こそ、彼にとつては、何よりも先づ第一に重要な問題なのである。彼れは、一度びこの法則を發見するや否や、それが社會的生活のうち結果となつて現はれるところのものを仔細に研究する。……隨つてマルクスは左の一事についてのみ努力することになる。それは、即ち嚴密な科學的研究によつて、社會的事情の特定の秩序の必然性を論證し、出來得る限り、公平に彼れの研究の起點たり、支持點たるべき事實を確定するといふことである。それには、現在における秩序の必然性と同時に、この秩序が不可避免的に移り行くべき他の秩序の必然性をも、論證すれば十分であつて、斯かる必然性を人類が信ずるか否か、意識してゐるか否かといふことは、敢えて問ふ所でないのである。マルクスは社會的の運動を以て單に人類の意志、意識及び意向から獨立するといふのみでなく、寧ろ人類の欲求、意識及び意向を決定する所の法則によつて、支配される自然史的の一行程なりとしてゐる。……意識的の要素が文化史上斯く從屬的の役目を演ずるに過ぎぬとすれば、文化それ自體を對象とする所の批判的研究においては、殊に意識の何等かの形態又は結果を研究の基礎とし得ざることとは自明の事實である。即ちこの批判的研究の起點たり得るものは、觀念ではなく、外部的の現象のみである。斯かる批判的研究の任務は一の事實を觀念に對してでなく、他の事實に對して、比較對照することに限られるであらう。この研究にとつて重要なことは、甲乙二個の事實をは、出來得る限り嚴密に檢覈し、甲が乙に對して、事實上同一進化の相異つた要素となつて

あることを發見する。殊に最も重要なことは、各秩序の順序を斯かる進化の各段階が依つて現はるところの前後の順序及び聯絡を、更らに劣るところなく嚴密に究明するといふ一事である。しかしながら人或は言ふであらう。經濟生活上の普遍律なるものは、それが現在に應用されると過去に應用されるところを問はず、すべて同一のものであると。これこそ、マルクスが否認せんとするところのものである。マルクスによれば、かゝる抽象的の法則は存在して居らぬのである。……彼れによれば、寧ろ反對に、歴史的の各時代はそれ自身の法則を有してゐる。……人類の生活なるものは、一定の發達期を越えるや否や、即ち一の段階から他の段階に進み入るや、從來におけると異つた法則によつて支配され始める。……舊來の經濟學者が經濟上の法則をば、物理化學上の法則に擬したことは、これ取りも直さず、經濟法則の性質を全く誤解したものである。現象をより深く分析することによつて、社會的の各有機體が——動植物有機體におけると同じく——根本的に相區別されるものであることが知られる。……しかのみならず、各有機體はその全構造を異にし、個々の器官も相一致することなく、斯かる器官の作用する條件も亦異つてゐる爲めに、同一の現象も全く相異つた法則の支配を受けるやうになるのである。」(資本論 第一卷 第二版序文)

かくの如き唯物辯證法的方法是社會的事象に對する唯物論的見解を探らしめることは當然である。マルクスがヘーゲル辯證法の逆立ちを主張したのは、それがその基礎を精神に觀念的なるものに置いたからである。マルクスはこれを脚の上に立たしめた。マルクスの出發點は物質である。エンゲルスはいふ。「デアウインが有機的自然の發展の法則を發見した如く、マルクスは人間の歴史の發展法則を發見した。この法則とは、從來過度の觀念的繁茂の下に蔽はれてゐた次の簡單なる事實である。即ち人類及び政治、科學、藝術、宗教等の生活を營み得る前に何よりも先づ食へ、飲み、住み、養はなければならぬ。従つて、直接の物質的生活資料の生産が、それ故にある民族、ある時代のその時々々の經濟的發達階段が、當該人類の國家制度、法律思想、藝術並に宗教的觀念をすら發達せしめた基礎であり、従つて、これらのものは、この基礎より説明するを要し、從來行はれた如く、その逆であつてはならぬといふ事實がそれである。(エンゲルス マルクス送葬の辭)

この唯物論的見地は、マルクスが「共產黨宣言」「經濟學批判」または「資本論」に至つて始めて、獲得されたものではない。既に一八四五年には、完成された形態において、この見地に到達してゐる。それは、マルクス・エンゲルスの共同執筆になる「ドイッチェ・イデオロギー」においてである。この著作の目的は、ドイツ觀念論者、殊にヘーゲル左翼に對する一聯の批判であつて、その觀念論に對する排撃であるとともに、共產主義の必然性の論證であつた。「共產主義は吾々に對しては作り出されねばならぬ

一の状態ではない。それは現實が、これを標準としなければならぬ理想ではない。吾々は現在の状態を止揚する現實的運動を共産主義といふのである。この運動の諸條件は現存の前提から生ずるのである。」(ドイッチェ・イデオロギー)この共産主義の必然性を證明することがマルクスの主たる目的である。而して、彼は、このことを論證するのに、社會現象の歴史性とその社會的關連とを明確にすることによつて、單に共産主義の必然性を立證したのみでなく、その史的唯物論の體系(社會學の體系)を樹立したのである。

マルクスは一の前提から出發する。それは恣意的な獨斷的な前提ではなくして、現實的前提である。マルクスはいふ。

「それは現實の個人とその行動と傳來的並に自己の行動によつて作られたその物質的生存條件である。従つてこの前提は、純粹なる經驗的方法によつて確認し得るのである。故にすべての人類史の第一前提は、勿論生ける個人の生存である。而して、最初に確認せらるべき部分は、この個人の身體組織とそれによつて與へられた他の自然に對する關係である。……すべての史的記述は、この自然的基礎及び人間の行爲による歴史の經過中におけるその變改から出發しなければならぬ。」(ドイッチェ・イデオロギー)

而して、人間の生きるためには、就中食ひ、飲み、住ひ、着ることなどが第一の必要である。もしこ

のことを爲し得ないとすれば、人間は何等「歴史を作る」ことは出来ぬ。故に人間の最初の歴史的行動は、これらの欲望の充足のための手段の製出、即ち物質的生活そのものの生産であつた。而して、この歴史的行動は、すべての歴史の根本条件である。人間はかくの如き根本的要求に従つて、自然に對する。而して、自然に對して働きかけるものは人間の労働である。

「労働は先づ人類と自然との間に於ける一行程、換言すれば、人類が彼れ自身の行爲に依つて、自然との間における代謝機能を媒介し、調節し、管理する所の一行程である。人類は一の自然力として、自然素材そのものに對立する。人類は、自然素材をば、彼れ自身の生活に使用し得べき形で占有せんが爲、彼れみづからの身體に屬してゐる諸種の自然力なる腕や、脚や、頭や手を運轉させる。彼れはこの運動によつて、彼れ自身の外部における自然に作用して、これを變化せしめ、斯くすることによつて、又、彼れ自身の自然を變化せしめる。彼れは、自己の自然の中に眠つてゐる諸種の伏能力を展開して、その活動を彼れ自身の支配の下に置くのである。」(資本論 第一卷 第三篇 第五章)

この自然對労働の關係において、労働の作用は外部的自然條件によつて制約せられる。「社會的生產の發達の大小は暫く措き、如何なる形態の社會的生產においても、労働の生産力は諸種の自然條件から獨立することは出来ぬ。此等の條件はいづれも、人種などの如き、人類を自身における自然と、人類を圍繞するところの自然とに歸着せしめることが出来る。外部的の自然條件は、經濟上二つの大部類に分

割される。一は生活資料の自然的富源たる肥沃な土地や、魚類に富む河海湖沼など、他は急激なる落流や、航行し得べき河川や、森林や、炭坑や、金屬鑛山などの如き、労働要具の自然的富源であつて、文化の初期にあつては、前の種類に屬する自然的富源が決定を與へ、より發達したる文化階段においては、後ちの種類の自然的富源が決定を與へる。」(資本論第一卷 第五篇 第十四章)

かゝる労働の外部的自然に對する作用において、人と人との關係が發生する。人間は生産において、常に自然に對してのみ關係するのではない。彼等は一定の方法において、共同に働き、彼等の活動を相互に交換することによつてのみ生産する。生産するがためには、彼等は互に一定の連絡および關係を認容し、且つこれから社會的の連絡および關係においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。」(マルクス 賃労働と資本)かくて人間における經濟的關係が、生産における發展とともに變化しつゝ、與へられるのである。經濟關係はかくして歴史的範疇である。

「人類が最初の動物状態から脱却して、その労働が既に或る程度まで社會化されるに至つたとき、茲に初めて、一方の人の餘剩労働が他方の人の生存條件になるといふ事情が生じて來るのである。文化の初期に於いては、労働の達成する生産力が低微であると同時に、欲望もまた低微に止まつてゐる。蓋し人類の欲望は、それを充足すべき手段の發達と共に、またこの發達によつて、發展するからである。更らに斯かる文化初期に於いては、他人の労働に依つて生活する社會部分は直接生産者の數に比

すれば、有るか無きかに小さい。而してこの比率は、労働の社會的生産力が増進するにつれて、絶對的にも相對的にも増進して來る。尙また資本關係なるものは、久しきに亙る發展行程の産物として與へられる經濟的地盤の上に生ずるものであつて、資本關係の起點たり、基礎たる労働生産力の發達は、自然の賜物ではなく、數萬年に及ぶ歴史の賜物なのである。」(資本論第一卷 第五篇 第十四章)

七

物質的生産にまで、人間の生活の本質を掘り下げたことは、マルクスの社會科學史上の特筆すべき功績といはねばならぬ。彼は既に述べたやうに、この場合、現實の生ける個人を出發點としたのであつて、決して、抽象的な孤立人をもつてしたのではない。彼ほかくの如き孤立的自然人の概念を排斥しやうとするものである。「スミスおよびリカードがそれを以て始めたところの、かの離群索民の獵夫や漁夫は、十八世紀の創意力に乏しき幻想に屬する。」(マルクス 經濟學批判 序説)「我々が歴史を遠く遡れば遡るほど個人は從つてまた生産する個人は、非獨立的な一のより大なる全體に屬してゐるものとして現はれる。最初には尙ほ全く自然的な方法で、家族に、および種族にまで擴大されたる家族に、後には、種族の對立と融合とから生じたる種々なる形態の共同團體に。……人間は最も言葉通りの意味において、社會的動物である。たゞに社會的動物であるのみならず、社會においてのみ個別化し得る動物である。社會の

外部における孤立せる個人の生産といふことは、——それは稀には、文明人が偶然に荒野に迷ひ込んだ場合に起り得るのであるが、かゝる文明人は既に種々の社會力を能動的に有してゐる——共に生活し、共に語る個人なくしての言語の發展といふに等しく一の背理である。」(經濟學批判 序説)

かくて、個人は社會——筆者はこの社會を基本社會と名づける——においてのみ生存する。個人、即ち人間の無い社會がないと同じやうに、基本社會なき人間は存在しない。何となれば、基本社會は人間の最も根本的な要求であり、生存條件である物質的生產をその本質とするからである。

「かくて、各個人がそのうちにおいて生産するところの社會的生產關係は、物質的生產手段の、從つて生産力の變動および發展とともに變化する。これらの生産諸關係は、その總和において、社會關係または社會と名づけられるところのものを構成し、且つ實に一定の歴史的の發展階段における一の社會を、即ち固有の、特殊の性質を有する一の社會を構成する。」(マルクス 賃労働と資本)

かくの如き基本社會は、個人の創意によつて作られるものではない。否個人に對しては、それは與へられたものである。「人類は彼等の生活の社會的生產において、一定の、必然の、彼等の意志より獨立せる關係を、即ち、彼等の物質的生產力のある一定の發展階段に適應するところの諸々の生産關係を與へられたものとして受取る。」(マルクス 經濟學批判 序説)

この立場において、マルクスは、社會に關する個人意志説の迷妄から解放されたのである。個人意志

説は所謂社會契約説であつて、第十八世紀中葉以前に決定的な支配を國家學または社會思想上に有し、第十九世紀においても、未だ可成の勢力を持つてゐたところの社會的お伽話である。このお伽話からの解放は、基本社會の本質に對する理解の第一歩であるといつてよい。マルクスは確實に、その理解の鍵を握つたのである。かくして、マルクスの社會學の出發點である生ける個人、即ち社會における個人を前提とすることは、論理的にいつても、また歴史的にいつても、最も妥當な出發點であるといはねばならぬ。而して、この出發點こそ、社會學的基礎法則としての史的唯物論を科學的に可能ならしめたものであり、幾多の批判に耐え得るものたらしめたのである。この點について、レーニンはいつてゐる。

「……今日に至るまで社會學者諸君は最も簡單なる、而も生産關係の如き本源的なる關係にまで下降することが出來ずに、直ちに政治—法制的形態の探查、研究に携はつた。彼等は此等の諸形態が一定時代に於ける人類の或る觀念から發生せる事實に當面した。——しかも彼等はそこで停屯した。されば社會的諸關係は宛も人間に依つて意識的に構成するが如き結果となつた。……反對に大衆は此の諸關係に無意識的に適應する。彼等は特殊的歴史的社會關係に關する表象と同じく此等の諸關係に關する表象を持つことは少い。だから人間がその下に永い世紀の間、生活して來た交換關係の説明は極く最近に至つて始めて與へられたのである。唯物論は人間の此等の社會的觀念そのものの起源に對して、より深刻な分析を續けて、此の矛盾を排除した。觀念の行程が事物の行程に依屬するといふ唯物論の

結論のみが、科學的心理學に一致する。更にまた他面、此の假説は社會學によつて始めて、科學の段階にまで高め上げられた。今日まで社會學者達は、社會現象の錯綜せる綱の中に於て、重要な現象と重要ならざる現象とを分けることに苦心した。而も彼等はかゝる區分の爲めの客觀的規準を見出し得なかつた。唯物論は『生産的諸關係』を社會の構造として取り出し、また此等の關係へ反復性の一般科學的規準の適用を可能ならしめて、完全なる客觀的規準を與へた。』(レーニン 人民の友とは何ぞや)

八

マルクスは、人間關係における最も基礎的なるものとして、生産諸關係を擧げ、その總和をもつて、人間の社會とした。而して、それは人間生活における最も基本的な下部構造であり、上部構造のよつて立つ基礎的事實としたのである。『これらの生産關係の總和は、その社會の經濟的構造、即ち法則上の、及び政治上の上層建築が、その上に立ち、一定の社會的意識形態がそれに適應するところの、現實の土臺をなす。物質的生活資料の生産方法は、社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程一般を條件づける。人類の意識が彼等の存在を定めるのではなくて、寧ろ反對に、人類の社會的存在が彼等の意識を定めるのである。』(マルクス 經濟學批判 序言)

マルクスは、社會經濟的下部構造とそのイデオロギーの上部構造との關係を早く次のやうにもいつて

ゐる。

「理念、觀念、意識の生産は、最初は直接人間の物質的活動及び物質的交通、現實の生活の言葉の中に織り込まれてゐる。人間の觀念、思惟、精神的交通はこゝでは、尙彼等の物質的行爲の直接の流出として現はれる一國民の政治、法律、宗教、形而上學等の言葉のうちに現はれる精神的生産についても同じことが云へる。人間は彼等の觀念、理念等々の生産者であるが、しかしこの人間とは、人間の生産力の一定の發展とその生産力に對應するありとあらゆる形態の交通の一定の發展とによつて條件づけられてゐるところの現實の、活動してゐる人間のことである。意識とは意識された存在以外の何ものでもあり得ない、そして、人間の存在とは彼等の現實の生活過程である。人間及び彼等の關係はすでにイデオロギーの中では暗箱に於けるやうに逆に映るか、この現象は、物體が網膜上に逆に映ることが、その直接の自然的過程から生ずると同様に、人間の歴史的な生活過程から生ずるのである。……

人間の頭腦の中の朦朧たる形式物もまた必然的に人間の物質的な經驗的に確證し得られ、且つ物質的前提と結びついてゐる生活過程の捕足物である。道德、宗教、形而上學、その他のイデオロギー及びそれに對應する意識諸形態は、こゝに於て最早獨立性の概觀を持たなくなる。それらは、歴史も發展も持たないのであつて、自分の物質的生産及び自分の物質的交通を發展せしめる人間は、これらの

現實性と共に彼等の思惟及び思惟の産物をも變化させるのである。意識が生活を決定するのではなく、

生活が意識を決定するのである。」(マルクス・エンゲルス、ドイツ・イデオロギー フォエルバッハ論)

社會的存在と意識の關係についてのマルクスの見解は、この引用によつて示さるゝ通りであるが、この點に關しては、論争が甚だ多い。生産關係の總和たる社會の經濟的構造が社會的、政治的、精神的生活過程一般を條件づけることは如何なる意味であるか。この問題に對する所謂唯物論的見解は、屢々誤解または誤用されてゐる。エンゲルスはいふ。「一體『唯物論』といふ言葉を、ドイツの多くの若い著述家は單なる口頭禪に使ふ嫌がある、即ち深い研究はしないで、何でもかでも唯物論にしてしまふ、言葉を換へていふならば、それは唯物論だといつて、それで問題を解決したつもりである。だが吾々の歴史觀は、何よりも先づ研究に際しての手引であつて、似而非へエゲル主義者流の徒らな體系構成の具では決してない。全歴史は新たに研究されねばならぬ。それがためには、吾々は各種社會形態の存在諸條件を一々について、探究しなければならぬ。さうした上で始めて吾々はそれらに照應する政治的、私法的、審美的、哲學的、宗教的等の種々の見方を、それらに基いて、導き出すことができるのである。」(シュミッ

トに與へたエンゲルスの手紙)

しからは、史的唯物論の眞意はどこにあつたか。晩年のエンゲルスは、種々の機會にこのことを説明してゐる。例へば、一八九〇年から一八九四年までに書かれたプロツホ、シユタルケンベルヒ宛の書翰

の如きはその著しい例である。エンゲルスは、こゝに史的唯物論の根本主張を説明していつてゐる。

「唯物史觀によれば、歴史における窮極の決定要素は、實際生命の生産及び再生産である。マルクスも余もこれ以上の主張をしたことがない。もし何人か、經濟的要素をもつて、唯一の要素と盲信するものがあれば、彼は、唯物史觀の命題を無意味な抽象的の荒唐無稽な言辭としてしまつたものである。經濟状態は基礎である。しかし、他の種々なる上層建築の要素——即ち階級闘争の政治的形態及びその結果、戦勝後、戦勝階級によつて定めらるゝ憲法、法律形態、及びこれらの現實的闘争の反映として、参加者の頭腦に生ずる政治的、法律的、哲學的、諸學說、宗教觀およびその教義體系への發達——は歴史的階級闘争の過程に影響を及ぼし、多くの場合、その形態を決定する。それはこれらすべての要素の相互作用である。而して、この相互作用の内に無数の偶然を通じて最後に經濟的運動が必然的なるものとして成就せられるのである。……」

「吾々は吾々の歴史を自ら作る。しかし、それは非常に限定せられた前提と條件の下においてである。これらの中、經濟的なるものが、窮極の決定者である。しかし、政治的條件、その他人間の頭腦中に往來する傳説の如きも、決定的のものではないが、一の役割を演ずる。」（エンゲルスの唯物史觀に関する書翰）
シユタルケンベルヒ宛の書翰の中には次のやうに述べてゐる。

「政治的、法律的、哲學的、宗教的、文學的、藝術的發達は、經濟的發達に依存する。しかしこれら

すべては、相互に、及び經濟的基礎に反作用をなす。經濟的狀態が單一能動的原因で、他のすべては、單に受動的作用をなすといふのではない。窮極において、常に成就せらるゝ、經濟的必然性の基礎の上での相互作用である。……それは、人々が便宜的に考へてゐるやうに、經濟的作用ではない。人間は自らその歴史を作る。たゞ既存の人間を條件づける環境、即ち既存の實際的關係を基礎としてのみである。この諸關係中經濟關係——それはまた他の政治的並に觀念的關係によつて非常に影響せらるゝのであらうが——窮極において決定的なものである。これがこの説の要領である。(エンゲルス 同上)

上層建築と下層建築との關係に關する理論は、前掲「シユミットに與へたエンゲルスの手紙」の中になほ詳細に論せられてゐる。この立場は、彼等の唯物論が機械論的唯物論でない當然の歸結であるといはねばならぬ。

九

「社會の物質的生産力はその發達のある一定の階段において從來それがその内に活動してゐたところの現存の生産關係、或はたゞその法的表現に過ぎざるところの所有關係と衝突するに至る。これらの關係は生産力の發展形態からその桎梏と變ずる。その時に社會革命の時代が到來する。經濟的基礎の變動するにつれて、巨大なる上層建築のすべては、或は徐々に或は急速に變革する。」(マルクス經濟學批判序文)

この主張は下部構造と上部構造との關係を、既に述べたやうに解釋するとき、それから必然的に導き出される歸結である。しかしながら、マルクスは、この社會的變革の物質的條件として、生産力の發展を擧げてゐる。曰く、「ある社會組織は、その社會組織のもとで發展した生産諸力に對し、その社會組織が狭ますぎるやうにならぬ以前には決して、滅亡するものでなく、また新たなより高度の生産關係は、その物質的存在條件が舊社會自體の母胎内において、孵化しうるまでは、決して舊社會組織にとつて代るものではない。」（經濟學批判序言）

マルクスのこの命題は社會における矛盾對立の要素の發展による社會組織の崩壊發展に關する理論である。人間の生活が、孤立的には不可能であり、その集團的生活が與へられたものとすれば、且つこの集團を形成する諸個人の有する物質的欲望が常に反覆増大する傾向を持つてゐて、その欲望は集團的生活の内においてのみその充足の可能性が存在するものとすれば、この集團は一の統一であるとともに、一の分化でなければならぬ。それが分化的なる所以は、常に増大反覆する欲望の充足に對しては、諸個人が各自の専門的技能を出來るだけ活動させて、その技能による生産力の發展を計らねばならぬ。かくて、個人の特種的技能はその生産物の交換によつて、自他の欲望をその生産力の範圍において、充足し得るからである。故に、社會を構成する諸個人が、出來るだけその物質的欲望を充足するためには、その諸個人は出來るだけ分化的でなければならぬ。單に職業における分業（生産部門の分業）のみではな

く、一生産部門内における技術的分業にまで到達しなければならぬ。而して、この分業——社會的分化——の存在は、集團としての諸個人の生活を可能ならしめるためには、一の統一、即ち社會的集化がなければならぬ。かくて、人間の集團的生活——人間の基本社會——においては、その必然的本質として、社會的分化と社會的集化が存在しなければならぬ。而して、社會的分化と社會的集化とは、一事實の兩面であつて、その孤立的存在があるのではない。

しかるに、この分化及び集化の作用は、基本社會の最も根本的な方面、即ち物質的生産に現はれる。人間の生活が孤立的でないならば、この作用はどこにおいても現はれるのである。而して、この作用は、その諸々な歴史的意義において人間の基本社會を動かすのである。即ち生産における單なる技術的分化並に集化の過程においても、または、生産における生産手段、生産組織の集化及び分化においても、基本社會を動かすのである。例へば、原始共產の社會は、生産技術における分化過程によつて、崩壊するの止むなきに至つた。原始共產制社會においては、その最初生産技術の分化過程から、遂に生産手段の所有における分化に轉化し、こゝに共產制社會は崩壊して、階級社會（私有財産制の社會）が成立するに至つたのである。この社會においては、生産の分化及び集化が、生産と生産手段の所有の分化及び集化として現はれその繼續的存在が、權力關係となり、その社會的規制としての階級の存在に轉化するに至つたのである。こゝに所謂階級社會は確立された。階級社會における分化及び集化の過程は階級化と

して現はれる。階級が一の生産を基礎とする社會的區分であることは、この根據から明かである。かくて、この生産によつて規制せられた階級化は、生産に對する異なる利害關係を構成する。かくて、歴史的現象中最も社會にとつて、重大なる意味を有するものは、この關係によつて、定められる。即ち生産を基礎とする階級は、生産手段に對する所有の分化であつて、従つて、生産の價値の取得の分化である。生産物價値の分化は、これらの階級の闘争の中心點となる。かくて、階級闘争は、社會的分化の一表現としての社會的矛盾對立を意味するものである。この意味において、土地共有制崩壊以後の社會の歴史は階級闘争の歴史であると論斷するのである。(共産黨宣言)この見地からいへば、階級の消滅とともに、史的唯物論の適用が消滅するといふやうな批判は維持し得ないものである。何となれば、階級闘争は、社會分化過程の一表現であつて、社會の存在するところ社會分化の終焉することがないのである。かくて、社會の發展に關する辯證法の見解は、社會的矛盾對立として階級闘争のみを意味するものではないのである。従つて、共産的社會における發展休止といふやうなことは云い得ないのである。

附言 史的唯物論について、論ずべきことは甚だ多岐なのであるが、この小論はその全部の解説を試みたのではない。たゞ一二の重要な點についてのマルクス・エンゲルスの見解を主として彼等の文章によつて記述したに過ぎない。史的唯物論の全體的解説は到底一論文の及ぶところではないし、本論においては、史的唯物論に關する最近の文獻についても何等觸れるところがなかつた。これらの諸點については他日を期したいと思ふ。讀者諒之。

一九三二・一一・一七稿了